

問題用紙

別紙の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

- ① 筆者が傍線部で述べていることをふまえて、詩を読むとはどのようなことなのか、あなたの考えを説明しなさい。
- ② あなたが将来、国語の授業を行うときに、詩を扱うことにはどのような意味や価値があると考えますか、述べなさい。

全体で600字以上800字以内で述べなさい。下書き用紙、答案用紙ともに回収します（下書き用紙、答案用紙の区別は左下に記載しています）。なお、下書き用紙は採点の対象にはしません。

詩とは、けつきよくのところ、なんだろう。

詩とは、あらずじを言うことのできないもの。詩とは、伝達のためのことばではないもの。「なにかでないもの」という言い方ならばできそうだが、「詩とはこれだ」とひとことと言うことはむずかしい。

詩は、雨上がりの路面にできた水たまりや、ベランダから見える鉄塔や、すがたは見えないけれどもとくから重い音だけひびかせてくる飛行機や、あした切ろうと思って台所に置いてあるフランスパンや、そういうものと似ている。

そういうもろもろの「もの」は、たしかにある状況のなかでは役割や意味をもつものだけれど、いついかなる場合にもその役割や意味をないつづけているわけではない。意味をはなれて、ただたんに存在しているだけのときもある。そういうときには、われわれはそれらを純粹に視線の対象物としてただ見て、世界の手ざわりを知る。

路面の水たまりを踏まないようにということ、わたしはあまり意識しないで歩く。水たまりははかないもので、短ければ数時間で消えてなくなる。道路のアスファルトの表面にある微妙なへこみのかたちを、水たまりはおしえてくれる。水面に油滴がおちていて、ピンクと緑だけが強調されたようなふしぎな虹色に光っていることもある。

鉄塔はわが家のベランダの真正面にあるわけではないので、はすかに組まれている鉄骨の一本一本は奥と手前がちよつとずつずれて見え、ひとつひとつとなる菱形や平行四辺形や三角形をいっぱい見せてくれる。背景は雲のながれる空である。

飛行機の音は天候によって、風向きによって、毎日わずかに調子がちがう。雲の上のあのあたりからきこえてくる、と思つてその方向を見るのだが、きつと飛行機は音よりはやくどこかに行つてしまつてゐる。

フランスパンはちらりと視界にはいつただけでも、そのごつごつ、ぱりぱりした表面の手ざわりをかならず思いおこさせる。あしたあれを切つたら、きつね色のかたい皮の内側から、穴だらけの、しらくふわふわしたところが出てくるのだ。ほんのわずかに酸味を感じさせる独特の匂いを、わたしは思い出してみる。

そういう「世界の手ざわり」は、人間のコントロールからこぼれおちているものだ。それらはただ、人間をとりまく環境としてそこにある。わたしは「手ざわり」に囲まれて生き、「手ざわり」から世界の正体を想像して日々を過ごす。

詩もまた、そういう手ざわりのひとつだ。

詩を読んでいてうれしいことのひとつは、その詩を読むことではじめて知つたような感情や知覚の微妙なありようを、あとになって実際に体験しなおすことがある、ということである。

つまり詩は、わたしがまだ知つていない「わたしの感じ方」をつくるきっかけになつてゐる。

詩を書く人がはじめに「言いあらわしたいこと」の全貌をこころのなかに用意し、それを技巧をつかつてじょうずに伝達するのだとしたら、読むわたしの側にこういふ感じ方は生まれないのではないかと思う。その場合そこにあるのは「伝えたい意味内容」の梱包(書

く側」と開栖（読む側）であって、余韻がない。

でも詩は、たぶん、「言いあらわしたいこと」より「ことばの美的な運用」が優先されるものなのだ。だから、書いた本人も自分がそんなことを書くなんて思いもよらなかったことが書かれることもあるし、書いた本人だからといってその一篇の詩を完全に読みとけるわけでもない。

このことは、自分が詩を書くようになっていつそうはつきりした。

ただひとつの「言いたいこと」を渾身の叫びのようにして書きつづけるタイプの人もいると思うが、表現者としては短命にならざるをえないだろう。詩にかぎらず、表現にかかわる人ならばみな自覚することだと思うが、表現に苦心する過程で「言いたいこと」はかならず変化してしまうのである。結果として、「自分はこんなことを言ってしまったのか」とおどろくことすらある。

詩を書くとき、人は謙虚になる。自分が自分の表現をすべて把握し、コントロールするということができないからだ。自分の知覚、自分の思考、自分で責任をとれることばを、詩はいつも超えてしまうのである。

渡邊十絲子「今を生きるための現代詩」



